

# 志願者本人記載資料がもたらす効果に関する検証

西郡 大 (佐賀大学)

本研究では、特色加点制度の検証を通じて、志願者本人が自分の高校時代の取り組みを振り返り、大学入学後の学びと摺り合わせて言語化することが、アドミッション・ポリシー理解の促進や志望学部とのミスマッチ解消に効果的であるのかを検討した。その結果、「これまで自分が頑張ってきたことを振り返る機会となった」、「志望学部に入りたいという意思が固まった」、「文章（言語化）にしたことで、自分の進学意識が明確になった」という進路意識の明確化がみられた。また、これらの心理的な変化に影響を与えていたのは、「最も自信のある取り組みの内容を掘り下げてアピールした」及び「大学入学後に何を学ぶかを分析してアピールできる点を探した」という戦略性と、「志望学部・学科等のアドミッション・ポリシーを調べた」及び「志望学部・学科等の学びの内容やカリキュラムを調べた」という具体的な対策行動であることが明らかになった。

キーワード：本人記載資料，特色加点制度，書類審査，効果検証

## 1. はじめに

高大接続改革を背景に、調査書や本人記載資料等を用いた評価の必要性が主張されるが、その効果についての研究蓄積は限られている（例えば、島田,2012）。加えて、大学全入時代においては大学と受験者の相互選択（マッチング）の重要性が増している。佐賀大学の一般選抜では、本人記載資料の提出を任意で求める「特色加点制度」を導入し、志願者に高等学校入学以降の主体的な活動を積極的にアピールすることを促すとともに、入学者と大学のマッチングを図ることを目指している。本研究では、同制度の検証を通じて、志願者本人が自身の高校時代の取り組みと大学入学後の学びを摺り合わせ言語化することが、アドミッション・ポリシー（以下、「AP」）理解の促進や志望学部とのミスマッチ解消に効果的であるかについて検討した。

## 2. 特色加点制度の概要と実績

特色加点は、大学入学共通テスト、個別学力検査等の合計点とは別に、志願者の高等学校入学以降の活動や実績を軸にして、AP との整合性の観点から評価するものである。申請は任意であり、志願者の意思に委

ねられる。特色加点申請で記載を求める項目を図 1 に示す。なお、2021 年度及び 2022 年度入試については、コロナ禍の影響を考慮し、新型コロナウイルス感染症の蔓延による影響と、その影響下での受験者自身の対応や行動等があれば記載できるようにした。

2019 年度入試から理工学部と農学部が先行導入し、2021 年度入試から、医学部を除くすべての学部の一般選抜で実施している（医学部は、従来より調査書や面接による多面的・総合的評価を実施している）。表 1 に各学部の配点等、表 2 に 2021 年度入試における特色加点申請の実績を示す。なお、特色加点制度の詳細については、西郡ほか（2020）を参照されたい。

1. 活動・実績の名称
2. 活動・実績の主催、認定、授与、発行等の機関等の名称
3. 活動期間または実績取得年月日
4. 活動・実績を証明する資料及び参考資料等の添付
5. 活動実績の概要（規模、参加資格、入賞条件、課題研究の成果など）【400字以内】
6. APや入学後の学習との関連性【400字以内】

図 1. 特色加点申請で記載を求める項目

表 1. 各学部における大学入学共通テスト及び個別試験の配点と特色加点の最大加点

実施学部	前期日程			後期日程		
	共通テスト	個別試験	特色加点	共通テスト	個別試験	特色加点
教育学部	900	400	20	1000	400	20
芸術地域デザイン学部	700	400	15	600	300	15
経済学部	700	100	15	700	100	15
理工学部	900	600	30	600	400	30
農学部	600	400	50	550	200	50

表 2. 2021 年度入試における特色加点申請の実績（入試区分別及び性別）

学部	入試区分			性別		
	日程	申請者数	申請率	性別	申請者数	申請率
教育学部	前期	111	71.2%	男性	89	56.3%
	後期	126	52.1%	女性	148	61.7%
芸術地域 デザイン学部	前期	57	79.2%	男性	31	68.9%
	後期	73	67.0%	女性	99	72.8%
経済学部	前期	182	56.3%	男性	191	37.6%
	後期	175	37.2%	女性	166	58.0%
理工学部	前期	428	57.4%	男性	703	42.7%
	後期	502	38.5%	女性	227	56.5%
農学部	前期	226	73.1%	男性	106	61.3%
	後期	98	55.4%	女性	218	69.6%
全体	前期	1,004	62.5%	男性	1,120	44.3%
	後期	974	42.3%	女性	858	62.3%

### 3. 方法

本研究では、志願者本人記載資料がもたらす効果として、志願者の高校時代の取り組みと大学入学後の学びを摺り合わせ言語化する申請書作成という行為がもたらす心理的な変化に注目した。分析に用いるデータは、2021 年度入試における申請の有無や申請者の属性（学部、入試日程、性別、現役浪人別等）といった出願データと、特色加点を課す学部の入学者を対象に実施した質問紙調査である。質問紙調査は、一般選抜の合格者を対象に郵送する関連書類に同封し、入学手続き書類提出用封筒に同封して返送を求めた。質問項目は、「出願以前の志望順位」、「出願を決めた時の合格可能性の認識」、「特色加点の申請有無」、「特色加点申請の準備状況」、「申請書に添付する根拠資料や参考資料の準備状況」、「申請書作成を通じて感じたこと」、「申請書作成の過程で行った対策」、「申請書作成において意識した戦略」で構成される。なお、出願データと連結するために受験番号の記入欄を設けた。これらのデータについて、以下に示す 5 つの視点から分析した。

【分析視点①】申請者の特徴を明らかにするために、志望度別（第 1 志望と非第 1 志望）、出願時の合格可能性の認識別、未申請者における未申請の理由について分析した。

【分析視点②】出願時における準備状況の実態を明らかにするために、属性別に比較を行い、誰がどのような準備を行っているのかを分析した。

【分析視点③】どのようなことを意識して申請書を作成したか、また、具体的にどのような対策行動をとったのかに関する項目スコアを分析し、その特徴を明ら

かにした。

【分析視点④】申請書作成を通して、どのような心理的な変化があったのかに関する項目スコアを分析し、その特徴を明らかにした。

【分析視点⑤】分析視点④で用いた項目を志願者本人による記載資料がもたらす進路意識の明確化として捉え、どのような戦略性を持ち、どのような対策行動をとることが進路意識の明確化に影響を及ぼすのかについて分析視点③の項目を用いて分析した。

### 4. 結果

特色加点を課す学部の一般選抜の入学者は 842 名であり、750 名から回答を得ることができた（回収率：89.1%）。そのうち、分析に必要な情報が欠けている 3 名を除いた 747 名の回答を有効回答とした。分析の視点別にその結果を以下にまとめる。

#### 4.1. 誰が申請をしているのか

有効回答の内訳は、申請者数が 479 名（64.1%）、未申請者数が 268 名（35.9%）であった。志望度（第 1 志望と非第 1 志望）による申請率の違いをみたところ、第 1 志望者の申請率は 73.9%と非第 1 志望者（56.1%）を 17.8 ポイント上回っており、志望度の違いが申請率に影響していることがわかる（表 3）。ただし、第 1 志望者でも 88 名（26.1%）が未申請、非第 1 志望者でも半数以上が申請している点に留意が必要である。

表 3. 志望度別にみた申請実績

志望度	申請者 (%)	未申請者 (%)	合計 (%)
第 1 志望	249(73.9)	88(26.1)	337(100)
非第 1 志望	230(56.1)	180(43.9)	410(100)

次に、出願を決めた時に自分の合格可能性をどの程度だと見積もって特色加点を申請しているのかをみた(表 4)。共通テストの自己採点結果や自分の学力を考慮して、合格可能性を「ほぼ 100%」と認識している申請者は 37 名 (7.7%) と少ない。合格の可能性を「60-70%程度」と認識している申請者数が 174 名 (36.3%) と最も多い。一方、未申請者は、「80%-90%程度」が 102 名 (38.1%) と最も多く、「ほぼ 100%」まで含めると未申請者の半数を超える (58.6%)。このことから、未申請者の多くは、特色加点申請によって加点されなくても十分に合格可能だと考えている。逆に、申請者の 39%は、合格可能性認識が 80%以上であっても申請しており、自信の有無にかかわらず、万全を期す受験行動を選好する集団だとみることができる。

表 4. 合格可能性の自己認識と申請実績

合格可能性認識	申請者 (%)	未申請者 (%)	合計 (%)
ほぼ 100%	37(7.7)	55(20.5)	92(12.3)
80%-90%程度	150(31.3)	102(38.1)	252(33.7)
60%-70%程度	174(36.3)	68(25.4)	242(32.4)
50%程度 (以下含)	118(24.6)	43(16.0)	161(21.6)
合計	479(100)	268(100)	747(100)

表 5 は、未申請者が申請しなかった理由である。最も多かったのは、「申請しなくても合格圏内だと判断したから」である (112 名, 41.8%)。また、日程別にみると、後期日程において、「特色加点があることを知らなかったから」が前期日程より 11.3 ポイント高い。これは、非第 1 志望の割合が多いためだと考えられる。なお、「その他」を選んだ者も一定数おり、自由記述欄に、「申請できるようなことがなかったから」といった理由が多く挙げられていた。

表 5. 申請しなかった理由

申請しなかった理由	前期 (%)	後期 (%)	合計 (%)
申請しなくても合格圏内だと判断したから	66(43.7)	46(39.3)	112(41.8)
合格圏内とは思わなかったが申請書作成が面倒だから	24(15.9)	20(17.1)	44(16.4)
特色加点があることを知らなかったから	23(15.2)	31(26.5)	54(20.1)
その他	35(23.2)	20(17.1)	55(20.5)
無回答	3(2.0)	0(0.0)	3(1.1)
合計	151(100)	117(100)	268(100)

#### 4.2. 誰がどのような準備をしているのか

申請者の準備状況について表 6 に示す。まず、「出願決定前から申請内容を考えて準備していた」が 171 名 (35.7%)、「出願決定後に、申請内容を検討した」が 308 名 (64.3%) であり、出願を決めてから検討を始める受験者が多い。性別でみると、「出願決定前から申請内容を考えて準備していた」において女性の方が 11 ポイント高い。志望度別では、第 1 志望者の約半数が出願前から申請内容を考えているのに対し、非第 1 志望者では、77.4%が出願決定後に内容を検討する傾向がみられる。一方、入試日程別では、第一志望の多い前期日程で、出願決定前から準備をしている傾向があると思われたが、両者に大きな違いはみられなかった。

次に、任意で添付することができる根拠資料や参考資料の準備状況をみたものが表 7 である。「すぐに準備できる状況だった」が 295 名 (61.6%) と最も多い。ただし、「出願決定前から申請内容を考えて準備していた」よりも、「出願決定後に、申請内容を検討した」とする人数が多く、根拠資料や参考資料の準備をしても、申請内容の決定は事後準備の傾向がみられた。一方、性別、志望度別、入試日程別には大きな差がみられないことから、申請内容の具体的な検討とは別に、根拠資料や参考資料となり得るものを予め蓄積していた可能性がある。この点については、本データからは読み取れないが、主体性等の評価が推進されてきた中で、高校現場においてどのような指導がなされているかは別途検討が必要である。

表 6. 申請内容の準備状況

準備状況	合計(%)	性別(%)		志望度別(%)		入試日程別(%)	
		男性	女性	第一志望	非第一志望	前期	後期
出願決定前から申請内容を考えて準備していた	171 (35.7)	83 (30.9)	88 (41.9)	119 (47.8)	52 (22.6)	138 (34.8)	33 (39.8)
出願決定後に、申請内容を検討した	308 (64.3)	186 (69.1)	122 (58.1)	130 (52.2)	178 (77.4)	258 (65.2)	50 (60.2)
申請者数の合計	479 (100)	269 (100)	210 (100)	249 (100)	230 (100)	396 (100)	83 (100)

表 7. 任意で添付する根拠資料や参考資料の準備状況

申請書に添付する根拠資料や参考資料の準備状況	合計(%)	申請書作成の準備状況(%)		志望度別(%)	
		出願決定前から申請内容を考えて準備していた	出願決定後に、申請内容を検討した	第一志望	非第一志望
すぐに準備できる状況だった	295(61.6)	132(77.2)	163(52.9)	153(61.4)	142(61.7)
手元になかったので準備に苦労した	68(14.2)	13(7.6)	55(17.9)	29(11.6)	39(17.0)
添付しなかった	116(24.2)	26(15.2)	90(29.2)	67(27.0)	49(21.3)
申請者数の合計	479(100)	171(100)	308(100)	249(100)	230(100)

#### 4.3. 申請書作成における戦略性と対策行動

まず、どのようなことを意識して申請書を作成したかという戦略性に関する項目別のスコアを表 8 に示す(「あてはまらない (1 点)」、「あまりあてはまらない (2 点)」、「少しあてはまる (3 点)」、「あてはまる (4 点)」。高いスコアを示すのは、「最も自信のある取り組みの内容を掘り下げてアピールした (1-2)」

(Ave=3.58)、「大学入学後に何を学ぶかを分析してアピールできる点を探した (1-3)」(Ave=3.42) である。これらは、特色加点制度についてホームページや説明会等で大学が強調して説明している点であり、受験生もそれを意識しているとみることができる。一方で、「戦略を立てずに、書けることを書いた (1-5)」(Ave=2.42) を詳細にみると、「あてはまる」の回答者が 88 名、「少しあてはまる」の回答者が 121 名おり、両者を合わせると回答者全体の 43.8% を占めている。つまり、最も自信のある取り組みや大学入学後の学びを分析してアピールできる点を考えているものの、それを戦略的に行っているとは認識していないと解釈できる。なお、各項目について、性別、入試日程、学部、志望度、現役浪人別では特徴的な差はみられなかった。

次に、具体的にどのような対策行動をとったのかに関する項目別のスコアを表 9 に示す(「まったくしてない (1 点)」、「あまりしてない (2 点)」、「少し行った

(3 点)」、「十分に行った (4 点)」。高いスコアを示したのは、「志望学部・学科等のアドミッション・ポリシーを調べた (2-1)」(Ave=3.77)、「志望学部・学科等の学びの内容やカリキュラムを調べた (2-2)」(Ave=3.54) である。特色加点は、「アドミッション・ポリシーや入学後の学びとの関連性」の記載を求めており、それに対する対策行動が喚起されたと考えられる。

一方、他者との相談に関する項目は、「高校・予備校等の先生やチューターと相談した(添削を含む) (2-3)」(Ave=2.70)、「家族や友人など身近な人と相談した(添削を含む) (2-4)」(Ave=3.04) であった。前者において「あてはまらない」が 139 名、「あまりあてはまらない」が 57 名で回答者全体の 40.9% を占めた。後者では、「あてはまらない」が 71 名、「あまりあてはまらない」が 56 名となり、回答者全体の 26.5% を占めた。これらのことから、申請書作成に関して、高校・予備校等の支援は、総合型選抜や学校推薦型選抜に比べてあまり積極的に行われてはいないようである。それに代わり、家族や友人などへの相談が相対的に多くなっているのではないかと考えられる。こうした傾向は、一般選抜ゆえの特徴といえるかもしれない。なお、項目番号の 2-1 と 2-2 では、女性及び第 1 志望のグループの平均点が高かったが、入試日程、学部、現役浪人別で違いはみられなかった。

表 8. 申請書作成の戦略性に関する項目の記述統計 (4 件法 : 4 点満点)

項目番号	質問項目	人数	平均値	標準偏差
1-1	様々な実績や成果を可能な限りたくさん書いてアピールした	479	3.03	0.93
1-2	最も自信のある取り組みの内容を掘り下げてアピールした	479	3.58	0.64
1-3	大学入学後に何を学ぶかを分析してアピールできる点を探した	477	3.42	0.74
1-4	添付した根拠資料や参考資料の内容や質にこだわった	477	2.66	1.10
1-5	戦略を立てずに、書けることを書いた	477	2.42	1.01

表 9. 申請書作成の対策行動に関する項目の記述統計 (4 件法 : 4 点満点)

項目番号	質問項目	人数	平均値	標準偏差
2-1	志望学部・学科等のアドミッション・ポリシーを調べた	479	3.77	0.56
2-2	志望学部・学科等の学びの内容やカリキュラムを調べた	479	3.54	0.66
2-3	高校・予備校等の先生やチューターと相談した (添削を含む)	479	2.70	1.26
2-4	家族や友人など身近な人と相談した (添削を含む)	479	3.04	1.08
2-5	SNS やインターネット, 受験情報誌などの情報を参考にした	479	2.38	1.13

#### 4.4. 申請書作成がもたらす進路意識の明確化

まず、申請書作成を通して、どのような心理的な変化があったのかに関する項目別のスコアを表 10 に示す (「あてはまらない (1 点)」, 「あまりあてはまらない (2 点)」, 「どちらとも言えない (3 点)」, 「少しあてはまる (4 点)」, 「あてはまる (5 点)」)。高いスコアを示したのは、「これまで自分が頑張ってきたことを振り返る機会となった (3-2)」 (Ave=4.52), 「志望学部に入りたいという意思が固まった (3-5)」 (Ave=4.27), 「文章 (言語化) にしたことで、自分の進学意識が明確になった (3-1)」 (Ave=4.03) である。特に、3-2 は標準偏差も小さく、大半の回答者の認識といえる。

一方、「作成前よりも、志望学部で学ぶ内容について理解が深まった (3-3)」と「申請書作成を通して、自分にとっての新しい発見があった (3-4)」の相関係数は  $r=0.52$  であり、申請書作成のプロセスで新しい発見や理解の深まりがもたらされていると思われる。なお、すべての項目で平均点は女性の方が高かった。入試日程では、前期日程において 3-3 と 3-5 が高く、志望度別では、3-1, 3-3, 3-5 で第 1 志望者の平均点が高い。学部別及び現役浪人別では、違いはみられなかった。

#### 4.5. 進路意識の明確化に影響する戦略性と対策行動

どのような戦略性を持ち、どのような対策行動をとることが心理的な変化に影響を及ぼすのかを明らかにするために、表 10 の 5 項目の合計点を「申請書作成

がもたらす進路意識の明確化」を示す尺度得点とした。なお、当該 5 項目の主成分分析の結果、第 1 主成分への負荷量の絶対値は、項目番号の 3-2 が .66 であるものの、他の項目はいずれも .70 以上となり、寄与率は 60.3%であった (5 項目の  $\alpha$  係数は 0.78)。これらのことから 5 項目の一次元構造が確認できる。

「申請書作成がもたらす進路意識の明確化」を従属変数、申請書作成における戦略性に関する 5 項目 (表 8) と対策行動 (表 9) を独立変数とし、ステップワイズ法による重回帰分析を行った結果を表 11 に示す。また、表 8~表 10 の項目間の相関係数を表 12 に示す。

「申請書作成がもたらす進路意識の明確化」に対して、戦略性に関する項目では、「最も自信のある取り組みの内容を掘り下げてアピールした」 ( $\beta=0.20$ ) と「大学入学後に何を学ぶかを分析してアピールできる点を探した」 ( $\beta=0.16$ ) の 2 項目が有意な影響力を持っており、対策行動に関する項目では、「志望学部・学科等のアドミッション・ポリシーを調べた」 ( $\beta=0.22$ ) と「志望学部・学科等の学びの内容やカリキュラムを調べた」 ( $\beta=0.23$ ) の 2 項目に有意な影響力が確認された。つまり、申請書作成において、志望学部・学科等の AP とともに、入学後の学びやカリキュラムを調べることで、そして、自分の最も自信のある取り組みを掘り下げて、大学入学後の学びと擦り合わせて文章 (言語化) にしてアピールすることが、申請書作成がもたらす進路意識の明確化に寄与していると解釈できる<sup>1)</sup>。

表 10. 申請書作成がもたらす進路意識の明確化に関する項目の記述統計 (5 件法 : 5 点満点)

項目番号	質問項目	人数	平均値	標準偏差
3-1	文章 (言語化) にしたことで, 自分の進学意識が明確になった	479	4.03	0.99
3-2	これまで自分が頑張ってきたことを振り返る機会となった	479	4.52	0.74
3-3	作成前よりも, 志望学部で学ぶ内容について理解が深まった	479	3.89	1.07
3-4	申請書作成を通して, 自分にとっての新しい発見があった	479	3.56	1.12
3-5	志望学部に入りたいという意思が固まった	479	4.27	0.99

表 11. 申請書作成がもたらす進路意識の明確化の規定要因 (重回帰分析)

準備状況や戦略に関する項目	申請書作成がもたらす進路意識の明確化	
	標準化係数 : $\beta$	
1-1. 様々な実績や成果を可能な限りたくさん書いてアピールした	.09	
1-2. 最も自信のある取り組みの内容を掘り下げてアピールした	.20***	
1-3. 大学入学後に何を学ぶかを分析してアピールできる点を探した	.16***	
1-4. 添付した根拠資料や参考資料の内容や質にこだわった	-.09	
1-5. 戦略を立てずに, 書けることを書いた	-	
2-1. 志望学部・学科等のアドミッション・ポリシーを調べた	.22***	
2-2. 志望学部・学科等の学びの内容やカリキュラムを調べた	.23***	
2-3. 高校・予備校等の先生やチューターと相談した (添削を含む)	-	
2-4. 家族や友人など身近な人と相談した (添削を含む)	-	
2-5. SNSやインターネット, 受験情報誌などの情報を参考にした	-	
自由度調整済み決定係数 : $R^2$	.37	

\*\*\* $p < .001$  - はステップワイズ法により当該変数が除去されたことを示す

表 12. 項目間の相関係数

	戦略性					対策行動					進路意識の明確化				
	1-1	1-2	1-3	1-4	1-5	2-1	2-2	2-3	2-4	2-5	3-1	3-2	3-3	3-4	3-5
1-1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
1-2	.107*	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
1-3	.136**	.263**	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
1-4	.195**	.140**	.231**	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
1-5	.084	-.029	-.145**	-.038	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
2-1	.135**	.204**	.346**	.154**	-.175**	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
2-2	.146**	.229**	.380**	.114*	-.153**	.511**	1	-	-	-	-	-	-	-	-
2-3	.113*	.060	.161**	.140**	-.146**	.123**	.115*	1	-	-	-	-	-	-	-
2-4	.183**	.080	.152**	.169**	-.034	.176**	.178**	.141**	1	-	-	-	-	-	-
2-5	.172**	.094*	.176**	.157**	-.026	.135**	.260**	.232**	.318**	1	-	-	-	-	-
3-1	.128**	.293**	.320**	.204**	-.106*	.381**	.361**	.161**	.148**	.145**	1	-	-	-	-
3-2	.141**	.335**	.217**	.127**	-.136**	.304**	.205**	.065	.103*	.085	.509**	1	-	-	-
3-3	.144**	.199**	.416**	.156**	-.112*	.398**	.462**	.167**	.183**	.165**	.598**	.347**	1	-	-
3-4	.206**	.246**	.239**	.221**	-.097*	.248**	.278**	.164**	.207**	.204**	.476**	.369**	.521**	1	-
3-5	.172**	.269**	.369**	.227**	-.103*	.407**	.427**	.197**	.241**	.212**	.639**	.435**	.608**	.484**	1

\* $p < .05$  \*\* $p < .01$

## 5. 考察

本研究では、佐賀大学の特色加点制度の検証を通じて、志願者本人が自身の高校時代の取り組みと大学入学後の学びを摺り合わせ言語化することが、アドミッション・ポリシー理解の促進や志望学部とのミスマッチ解消に効果的であるかについて検討した。

4.4 節で示したように、特色加点の申請書作成を通じて、「これまで自分が頑張ってきたことを振り返る機会となった (3-2)」、「志望学部に入りたいという意思が固まった (3-5)」、「文章 (言語化) にしたことで、自分の進学意識が明確になった (3-1)」という進路意識の明確化に関する 3 項目は、5 点満点で 4 点以上となり、自身の振り返りによる進路意識の明確化とともに入学意思の強化に繋がっている様子が見取れる。

また 4.5 節で示したように、こうした進路意識の明確化に影響を与えていたのは、「最も自信のある取り組みの内容を掘り下げてアピールした」及び「大学入学後に何を学ぶかを分析してアピールできる点を探した」という戦略性と、「志望学部・学科等のアドミッション・ポリシーを調べた」及び「志望学部・学科等の学びの内容やカリキュラムを調べた」という具体的な対策行動であった。これらの結果は、「自省の機会を入試プロセスに組み込み、適性や志向との摺合せを自ら行ってもらおう」(西郡ほか, 2020) という特色加点制度の狙いがうまく機能していると捉えることができる。

なお、特色加点を先行して導入した理工学部と農学部の入学者の追跡調査では、入学後 1 年後の GPA が申請者のグループの方が高いことに加え、入学時のアンケート調査の結果からは、「受験時における志望学部の AP 認知 (受験時に AP を知っていたかどうか)」、「志望分野で学べることの満足度」、「自律性」、「リーダー性」という 4 項目でスコアの平均値が未申請者よりも高いことを確認している。つまり、申請するという行為を「学びに向かう態度」の一部だと考えれば、未申請者よりも申請者の方が、大学・学部にとって望ましい学生像に近いと考えても良いであろう。

ところで、冒頭に示したように、2021 年度と 2022 年度入試は、コロナ禍による影響についても任意で記述を求めており、2021 年度入試では、申請者の約半数が記載していた。その内容の約 9 割は、「当たり前に行き、人と会うことがどれだけ幸せなことであるかを感じた」、「学校は勉強するためだけの場所ではなく、対人関係を学んだり、社会性や協調性を身に付ける場所でもあることを再認識した」、「今までのやり方や様子を踏襲するのではなく、課題や変化に対応しながら物事を実行していくことの大切さを学んだ」など、

コロナ禍という現実に順応しながらも、そこから何らかの教訓を得ることができたといったものであった。受験生にとって過酷な現実を受け止めながらも、それを咀嚼しようとする中で、自分が頑張ったことや、学んだことの振り返りが強化され、進路意識もより明確になったのかもしれない。

一方で、本研究の限界と課題にも触れておきたい。特色加点制度は、任意申請という仕組みの性格上、申請するかしないかの判断は重要な分岐点だといえる。というのも、未申請者の約 40% が「申請しなくても合格圏内だと判断したから」を未申請の理由に挙げており、ある意味で強気の選択をしている様子が見られる。その反面、「合格圏内とは思わなかったが申請書作成が面倒だから」、「その他」に多く含まれていた「申請できるような活動を持ってなかったから」といった消極的な理由で申請を行わなかった者も一定数含まれる。いずれの理由にせよ、任意申請というシステムにより、本人の意思によるフィルターがある程度かかっている。仮に、申請書提出を必須化した場合、これらの未申請者のグループにおいてどのような心理的な変化が生じるかは別途検討が必要だろう。また、本研究の分析は、申請書作成という行為のみに注目しており、申請の内容やその採点結果との関係性は考慮していない。こうした点については、これからの研究課題である。

最後に、今後の展望を述べる。本研究では、記載事項として何を求めることがより有効なのか、どのような資料作成のプロセスを志願者に経験させることが効果的なのかといった点までは明らかにできていない。この点については、メタ認知、動機づけの理論等の学術的な枠組みからのアプローチが必要である。これらの視点から研究を進めることで、効果的な本人記載資料の様式や入試での活用方法の在り方を提案したい。

## 注

- 1) クロス表分析で特徴がみられた性別をダミー変数としてみたが、有意な影響は確認できなかった。そのため、戦略性や対策行動に焦点を当てるために分析から外した。

## 謝辞

本研究は、科研費 (22K02717) の助成を受けたものである。

## 参考文献

- 西郡大・福井寿雄・園田泰正 (2020) . 「一般入試における主体性等評価の導入とその結果—特色加点制度に対する高校教員の不安と受容—」『大学入試研究ジャーナル』, 30, 1-7.
- 島田康行 (2012) . 『「書ける」大学生に育てる』大修館書店.